

静岡市郊外の棚田でお米を作って23年

天岸祥光

(2) 田んぼに生える植物の多様性 (その1)

<コナギ>

一年生草本で毎年現れることもあるが、一度現れるとなかなかしつこい厄介な水草。基本的には抜くことにしているけれど、いくら抜いても一週間後にはまたしっかり生えてきて稲の生育を妨げる存在になる。コナギは万葉集にも出てくるそうです。

写真左がそのコナギ (ミズアオイ科)、右がやむを得ず代掻きでコナギを除去しているところ。花は秋に咲くが、春咲くこともたまにある。咲くと小型の結構きれいな紫色をした花である。また、観察していると、どこにでも出るわけではなく、わりと決まった田んぼに出てくる傾向がある。



<ミゾソバ (ウシノヒタイ)>

これは蕎麦に似たタデ科の一年生草本で、葉っぱの形が牛の額に似ているところからウシノヒタイとも呼ばれている、手ごわい雑草である。水気が少なくなると畔だけでなく田んぼ一杯に広がってしまう。花は白や赤っぽいのがある。これは棚田のどこにでも現れるし、一年草でも毎年現れる。



<ドクダミ科>

どこにでもあるドクダミが水の中でもこんなに繁茂するとは思わなかった。これも一旦はび

こってしまうと相当厄介な曲者なので、出始めたらなるべく早く駆除してしまう必要がある。

同じドクダミ科の半夏生 (ハンゲショウ) も我々の棚田には植わっている。これは私が近くのお茶畑をやっている農家の人から、二株ほど分けてもらって二段の片隅に植えたのが増えたものである。まさに半分化粧した様な、白い葉っぱを見せてくれるので、こちらは人気植物として逆に愛されている。これが出るころまでに田植えを終えるようにとされている (半夏生の日 は 7月2日頃)。



繁茂してしまったドクダミ

鑑賞のために積極的に植えて増えた半夏生

<セリ>

春の七草のセリもよく出てくる。一年草本だけど、いたるところに毎年出る。



これがセリ、ちょっと油断すると右のように一面セリだらけになってしまう。

<クレソン>

人気のクレソンは年に何回も生えてくる。最近2段に小さい貝が沢山出現するようになり、カワナとは違うので、これがヘイケボタルの幼虫の餌になるのだろうと思い、静大理学部の延原先生 (NPOの理事でもある) に鑑定してもらったところ、やはりそうでヒメモノアラガイという貝であった。最近ヘイケボタルが沢山出るようになったのもこの貝と関係しているの

あろう。しかし大問題が出てきた。この貝には寄生虫がいてそれが水草について人間の体に入ると肝蛭（かんでつ）症や膀胱蛭症を発症する恐れがあるというのです。

いまのところクレソンの出る田んぼにはほとんどいないようであるが、クレソンを生で食することには警告を出さざるを得ないであろう。



クレソンとその花

<コブナグサ>

一年生草本だけど、畔や溝を中心にあちこちによく生えてくる。有名な絹織物「黄八丈」の染料はこれから採る。昔の化学分野の同僚がこの黄色の構造を決定するために伊豆 大島に毎年夏になるとこれを採りに出かけていたので、よく覚えている。この一年草は稲にとってそれほど邪魔な存在ではないが、気が付くと一面に生えてしまっている。



<カズノコグサ>

実が数の子に似ているので牧野富太郎がそう名付けたそうである。田んぼにとってそれほどしつこい雑草ではないし、時々現れる程度である。



<エンドウ三兄弟>

エンドウ豆には、カラスノエンドウ、スズメノエンドウ、その中間の大きさのカスマグサの三種類がある。カラスの「カ」とスズメの「ス」

の間にあるからカスマグサと言う名前が付いたようである。この左の写真だとわかりにくいけれど、これ全部上記の三種類のエンドウである（カラスノエンドウが多い）。ちょっと給水状態が悪くなると、ご覧のようにたちまち一面にはびこってしまう。右の写真の大きい実がカラスノエンドウ、下の小さい実がスズメノエンドウ。



<ミゾカクシ（アゼムシロ）>

名前の通り田んぼ一面を覆うように生えてくる。多年生草本であるが、ごく稀にしか現れない。しかし、わりと印象的な花を付けるので、よく覚えている。



<アオウキグサ(左)、チドメグサの仲間(右)>

どちらも水面にびっしり出現するけれど、特に悪さをすると考えられないし、かえって他の雑草の出現を抑えてくれるようにも思えるので、そのまま放っておくことにしている。



田んぼの周辺の植物には最近の外来種の侵入がほとんど無いことに気が付いたので、次回はその環境の中での多様性について述べてみたい。